千葉県文化財センター調査報告第341集

鎌ケ谷市南初富３丁目所在馬土手

── 船橋・我孫子バイパス線建設埋蔵文化財調査報告書 ──

平成10年３月

千　葉　県　都　市　部

財団法人千葉県文化財センター

序　　文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第341集として、船橋・我孫子バイパス線建設事業に伴って実施した鎌ケ谷市南初富３丁目所在馬土手の調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、近世に構築された小金中野牧の馬土手の構造と機能を知るうえで貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また文化財の保護普及のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成10年３月31日

財団法人　千葉県文化財センター
理事長　中　村　好　成

目　　次

Ⅰ　はじめに …… 2
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 2
Ⅲ　遺構・遺物 …… 4
　1　遺構 …… 4
　2　遺物 …… 8
Ⅳ　まとめ …… 8

挿図目次

第1図　遺跡周辺地形図・馬土手分布図 …… 3
第2図　南初富3丁目所在馬土手地形図 …… 3
第3図　南初富3丁目所在馬土手平面測量図 …… 5
第4図　第1トレンチ土層断面図・平面図 …7
第5図　第2トレンチ土層断面図・平面図 …7
第6図　第2トレンチ出土銭貨 …… 8
第7図　小金牧各内牧の分布図 …… 9
第8図　迅速測図「小金町」「八幡町」
　　(1：20,000) に見る本馬土手 …… 9

表・図版目次

第1表　鎌ケ谷市域の馬土手の特徴 ……10
図版1　遺跡周辺空中写真
図版2　1.調査前近景(南西から)
　　2.調査前近景(北東から)
　　3.第1トレンチ全景(南西から)
図版3　1.第2トレンチ全景(南西から)
　　2.第2トレンチ全景(北東から)
　　3.第2トレンチ土層断面(南西から)
　　4.第1トレンチP1・2(南東から)
　　5.第2トレンチP3(南東から)
　　6.県指定史跡小金中野牧の込跡
　　7.調査区隣接の馬頭観世音等合祀場所

凡　　例

1　本書は、船橋・我孫子バイパス線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2　本書に収録した遺跡は、千葉県鎌ケ谷市南初富3丁目648－1,327ほかに所在する南初富3丁目所在馬土手（遺跡コード224-009）である。
3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県都市部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
4　発掘調査及び整理作業は、調査部長西山太郎、北部調査事務所長折原繁の指導のもと、研究員白鳥章が下記の期間に実施した。
　　発掘調査　平成9年6月11日～平成9年6月23日
　　整理作業　平成9年6月24日～平成9年6月30日
5　本書の執筆は、研究員白鳥章が行った。
6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県都市部街路モノレール課、鎌ケ谷市教育委員会の御指導、御協力を得た。
7　馬土手には、「野馬土手」「野馬除土手」等の別称があるが、本書では、「馬土手」を採用した。
8　本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
　　第1図　国土地理院発行　1/25,000地形図「松戸」〔ＮＩ-54-25-2-1〕(平成6年発行)、「白井」〔ＮＩ-54-19-14-3〕(平成9年発行)、「習志野」〔ＮＩ-54-19-14-4〕(平成8年発行、「船橋」〔ＮＩ-54-25-2-2〕(平成8年発行)
　　第2図　鎌ケ谷市役所発行　1/2,500「鎌ケ谷市都市計画図」〔ＩＸ-ＬＥ09-1,ＩＸ-ＬＥ09-3〕(平成2年発行)
　　第8図　参謀本部陸軍部測量局発行　1/20,000迅速測図「小金町」「八幡町」(明治13年測量、19年製版、20年出版)
9　航空写真は、京葉測量株式会社による昭和45年撮影のものを使用した。
10　本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

I　はじめに

平成８年10月、千葉県都市部東葛飾都市計画事務所は、船橋・我孫子バイパス線建設の計画に伴って、埋蔵文化財の取り扱いについて県教育委員会に照会した。

その結果、馬土手１条の内250㎡について、発掘調査による記録保存の措置を講じることになった。

平成９年６月11日から平成９年６月23日まで、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を行い、同時期に地形測量を業者委託して実施した。

発掘作業は、トレンチ法を用い、馬土手に直交するように２本のトレンチを設定し、土層を観察した。これは、馬土手の構築法の解明及び堀（溝）等の遺構確認を目的としたものである。

調査の結果、本馬土手は、一重の馬土手で堀を伴う可能性があることが判明した。また、土手の南袖下から柵列状のピットの存在が確認された。遺物は、寛永通宝が２点出土した。

II　遺跡の位置と環境

本馬土手は、千葉県鎌ケ谷市南初富３丁目648－1,327ほかに所在する。

鎌ケ谷市は、千葉県の北西部に位置し、北に松戸市・沼南町、西に市川市、南に船橋市、東に白井町と接している。

地形的に見ると、本市は標高約25mから30mの下総台地の西部に位置する。新京成電鉄の路線と県道千葉・鎌ケ谷・松戸線は、台地の分水嶺を貫通しており、鎌ケ谷市をほぼ南北に二分している。この分水嶺に当たる台地を開析する小河川（谷津）は、北部においては主に大津川と金山落しに合流し手賀沼へと北流している。南部においては、中沢地先で谷地川に合流し、やがて市川市域で大柏川（真間川水系）となって東京湾に流入している。本馬土手を始めとして、下総小金牧は、上記のような自然地形を巧みに利用して構築されたと考えられる。

戦後、旧鉄道連隊演習用鉄道を受け継ぎ、昭和30年に開通した新京成電鉄の路線は、小金牧の立地とほぼ一致しており、まさに近世以降の鎌ケ谷は「牧と鉄道」と共に発展してきたとも言えよう。

また、本市は、戦前・戦後を通して、東京の近郊農業地として発展し、とりわけ梨の生産地として名高い。さらに、平成３年に開通した北総開発鉄道により、一層都心に近くなり、ベッドタウン化に拍車がかかっている。

本馬土手は、大津川の源頭部の最南端に隣接し、北西約1.5km地点には県指定史跡小金中野牧の込跡、南西約１kmの地点には木下街道と小金下野牧の込跡が所在する。

本馬土手の南東脇の稲荷前三叉路には、馬頭観世音（昭和40年）、二十三夜塔・道標（明治41年）、出羽三山参拝記念塔（昭和51年）、十六夜念仏講（大正８年）、月講（大正４年）、浅間大祀（昭和３年）などが合祀されている（図版３－７）。その他、近隣には旧石器時代の林跡№１～４遺跡、縄文時代の中沢貝塚・木戸脇貝塚等が所在し、原始・古代から近世にわたり数多くの遺跡が分布している。

第1図　遺跡周辺地形図・馬土手分布図(1：25,000)

第2図　南初富3丁目所在馬土手地形図(1：2,500)

Ⅲ　遺構・遺物

1．遺構　（第３・４・５図、図版２・３）

(1) 現況

調査前は、竹林と雑木林が繁茂しており、馬土手の東側は既に削平されていた。調査区の西側は大津川の谷津頭になっており、現在は鎌ケ谷市の中央児童センターが所在する。本馬土手は、その谷津に向かって緩やかに傾斜している。南側は民家が隣接しており、北側は、船橋・我孫子バイパス線建設用地として買収されている。

地形測量（第３図）によると、馬土手周辺と頂上部との比高差は約2.8m、頂上部幅約1.4m、基底部幅約6.0m、主軸方向はＥＮＥ－ＷＳＷである。また、馬土手の北裾部に沿って僅かな窪みが見られることから、堀（溝）の存在が予測できた。

南側は、裾部の際までアスファルト舗装されており、堀の有無については予測不可能であった。

また、南側面は北側よりも僅かに傾斜が急であるが、崩落によるものか、人為的な削平によるものかの判断は難しかった。

(2) 調査方法

調査前の現況写真を撮影した後、20cmコンターで平面地形測量を実施した。さらに、馬土手に直交するようにトレンチを２か所設定し、西側から第１トレンチ（１Ｔ）・第２トレンチ（２Ｔ）とした。調査の主眼は、トレンチの土層断面観察と記録、馬土手の構築法の解明と馬土手下の遺構確認においた。

(3) 調査結果

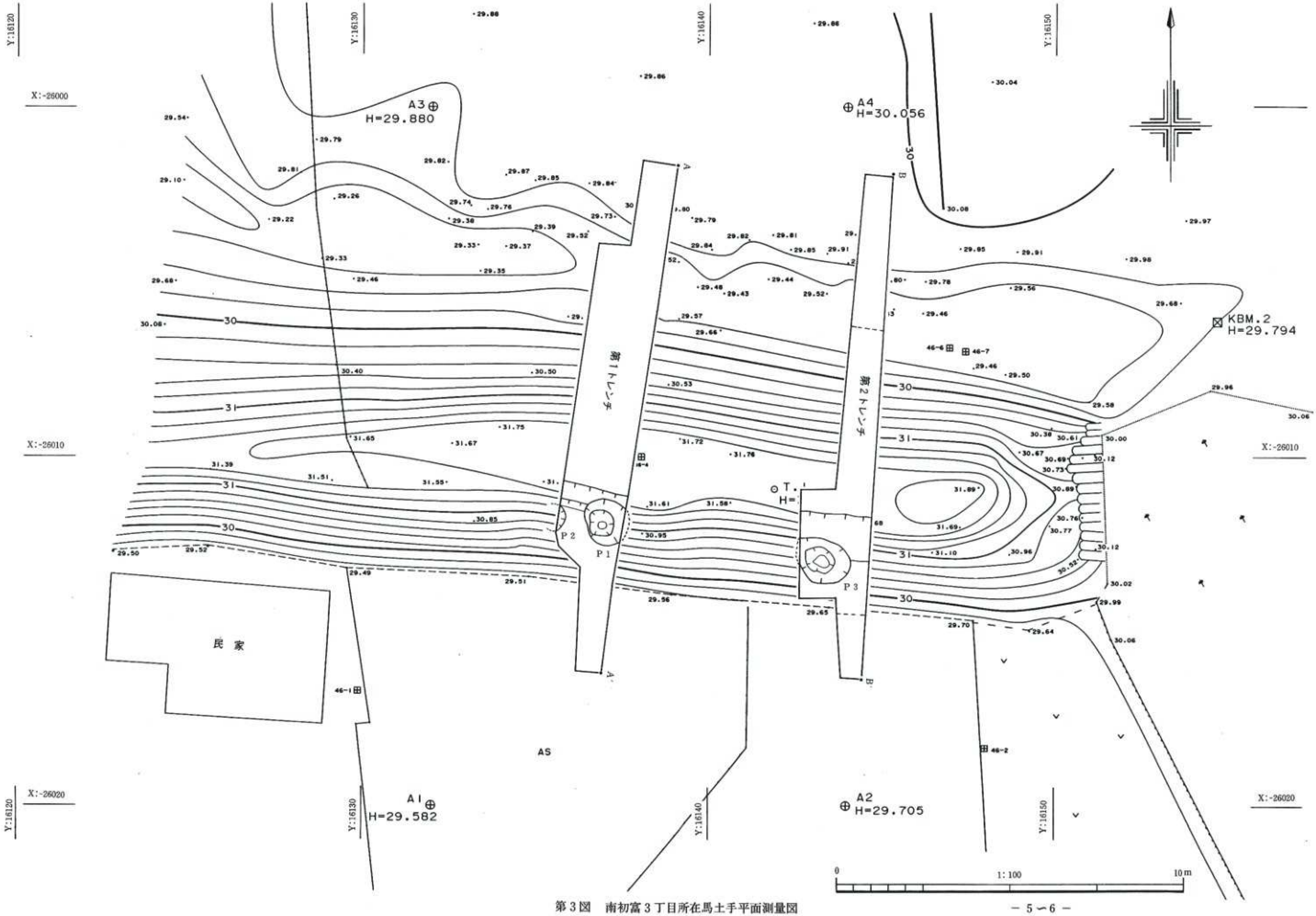
第１トレンチ（第４図、図版２・３）

土層断面の観察結果によれば、馬土手の主軸に対して北側半分に旧表土（16層）が残存していた。その上層部の12層は、ソフトロームを主体とした黄褐色土であった。これは、南側半分の地山を掘削して北側に盛土し、11・12層を土台面とした結果と思われる。

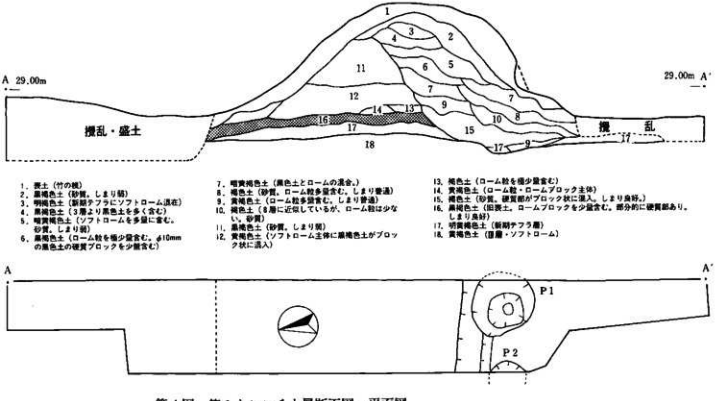
また、南側半分の土層は南下に傾斜して縞状に堆積している。これは、北側の堀を掘削した際の残土を盛土した結果と推定できる。ただし、北側の裾部は近年の攪乱が著しく、明確な堀の存在は確認できなかったが、現表土面が馬土手に沿って僅かに窪んでいるので、堀が存在していた可能性は大きい。

16層（旧表土）は、部分的に硬くしまっている。また、８・９・15層もローム粒を多量に含み、しまりもよいので、基盤面のみ版築した可能性がある。反面、それより上層は、軟弱な堆積である。

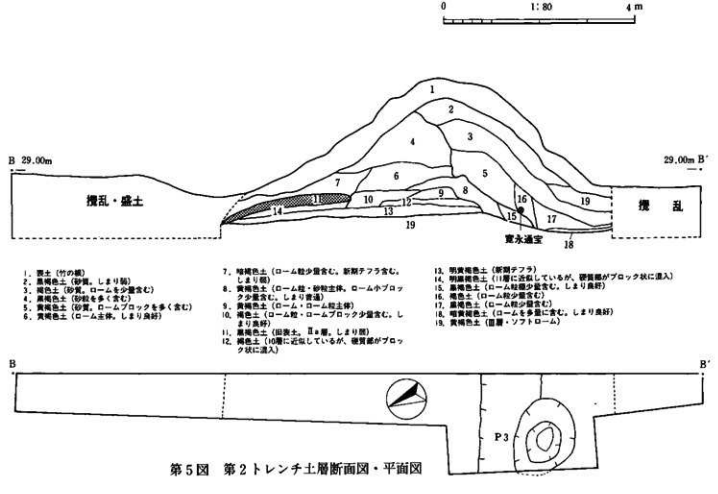
馬土手より下の遺構の存在であるが、トレンチ調査範囲から柵列状のピットが２か所確認された（Ｐ１・２）。共に、頂部より南側の基底部にあり、馬土手の主軸に平行している。Ｐ１の平面形はほぼ円形で上端径約1.5m、断面形は浅い盥（たらい）状を呈している。Ｐ１とＰ２の間隔は中心幅で約1.8m（約１間）と推定される。なお、このピットの性格であるが、本馬土手の構築以前（古代～中世）になんらかの柵列があったか、本馬土手に伴う施設か不明である。



第3図　南初富3丁目所在馬土手平面測量図



第4図　第1トレンチ土層断面図・平面図



第5図　第2トレンチ土層断面図・平面図

第２トレンチ（第５図、図版２・３）

土層観察の結果であるが、第１トレンチと同様に北側の袖部下に旧表土（11層）を残している。また、堀を掘削した際の残土を盛土して版築し、馬土手の基盤面としていると思われる。これは、６・８・９・10・12・14・15層にローム粒とロームブロックが多量に混入しており、なおかつ土層のしまりが良好なことを根拠としている。

反面、基盤面より上層は、しまりがない。これは、土手の周囲の表土を削平して盛土したためと推定される。なお、頂部の土質は全体的に砂質である。

北側の裾部は、第１トレンチと同様に攪乱が著しいが、おそらく堀が存在していたと思われる。南側の袖部は、裾際まで舗装されており、なおかつ下層まで攪乱されているので、堀の存在については、不明である。

馬土手下の遺構であるが、第１トレンチと同様、頂部の中心よりやや南側の基底部からピット（Ｐ３）が１基確認された。平面形は長楕円形で、上端最大径は1.8mである。断面形は、第１トレンチのピット（Ｐ１・２）と同様である。以上の結果から、Ｐ３はＰ１・２と同時期で一連の柵列ピットと考えられる。

２．遺物（第６図）

第２トレンチの16層下部から１点、南側の攪乱から１点、それぞれ寛永通宝が出土した。攪乱出土の寛永通宝は腐食と破損が著しいので実測・拓本は省略した。

第16図の銭貨の形状は、直径23mm、最大厚1.1mm重量2.1ｇの銅銭である。新寛永銭で、18世紀前半の鋳造と推定される。

なお、本銭貨以外の遺物の出土は認められなかった。

第６図　第２トレンチ出土銭貨

Ⅳ　まとめ

今回発掘調査した南初富３丁目所在馬土手は、「小金中野牧」（松戸市、鎌ケ谷市）の一部である。「中野牧」のほかに、「上野牧」（流山市、柏市）、「下野牧」（鎌ケ谷市、船橋市、習志野市、千葉市）があり、これらを称して「小金三牧」と言う（第７図）。

これは、徳川幕府が慶長19年（1614）に古代から所在していた御牧（官牧）を整理して設置したものであり、この他に「佐倉七牧」（矢作牧、内野牧、取香牧、高野牧、柳沢牧、油田牧、小間子牧）がある。

その後、享保７年（1722）に、小金三牧は「高田牧」（柏市）と「印西牧」（印西市、白井町）を加え、計五牧となった。

また、松戸市金ケ作にある「陣屋跡」（第７図）は、小金牧と佐倉牧を統轄していた旗本小宮山杢進（もくのしん）の居住した跡である。なお、野馬奉行は綿貫氏が担当した。中野牧は、このような歴史的背景のなかで発展し、小金牧のなかでも重要な位置を占めていた。

小金牧内には、今でも「五助木戸[11]」（松戸市）、「白井木戸」（白井町）、「高根木戸」（船橋市）や、「牧の木戸」（印西市）、「馬込」（船橋市）、「牧の原」（松戸市）などの牧場に因んだ地名が残っている。

また、本土手の北西約1.5kmの地点には、県指定史跡小金中野牧の込跡が所在し、ほかにも３か所の込跡が知られている（第７図）。

この込跡は、「捕込場」とも言い、馬土手内に放牧していた野馬を年に一度捕込場に追込み、軍馬（三歳駒）と農耕馬に選別した施設のことである。

馬土手は、このように通常は放牧されていた野馬によって、農作物が荒らされることを防止するために構築された施設である。

牧場の管理は、野馬奉行が受け持ち、小金の綿貫氏がこれにあたった。また、野馬奉行は、有力な村名主を「牧士」に任命して、牧場の経営にあたらせた。一方、付近の農民は、牧場の手入れや月６回の野廻りなどに駆りだされたり、野馬捕りの勢子として使われることがあった。

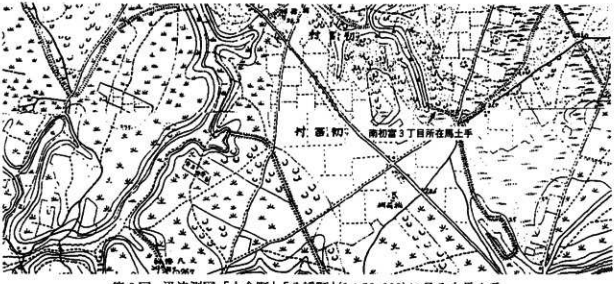
江戸中期においては、小金牧には約1,000頭の野馬がいたと言われ、末期には約1,900頭に増加していたと言う。[2]

馬土手の形態には、「一重土手」と「二重土手」がある。前者には、堀（溝）を伴うものと、伴わないものがある。伴うものは地境に多く、伴わないものは牧場の区切り土手であると言う。[3] これに従えば、本馬土手は、「一重土手で、堀を伴う可能性がある」ので地境土手と考えられる。なお、「二重土手」は、「お囲い場」[4]か、脱出厳禁の場所に構築されたと言う。[5]

こうして発展した牧にも、近代の幕開けと共に、やがて新しい開発の手が加えられることになる。明治２年(1869)、明治政府は「下総開墾会社」を設立させ、小金牧と佐倉牧の開墾事業に着手し始めた。

その中で、一番最初に開墾の手が入ったのが、中野牧であり(明治２年10月)、最初の開墾地に因んでその地を「初富村」(鎌ケ谷市）と名付けた。以後、入植順に「十余三村」(成田市）まで、順序よく村名を付けていった。しかし、明治５年（1872）には経営

第７図　小金牧各内牧の分布図
（『松戸市史』中巻・第43図「享保７年実測の小金牧各内牧の略図」より引用）



第８図　迅速測図「小金町」「八幡町」(1：20,000)に見る本馬土手

第１表　鎌ケ谷市域の馬土手の特徴

遺　跡　名	規模（m）			堀（溝）の有無と形態	土手の形態	備　考・文　献
	現在高	基底部幅	頂部幅			
東初富１丁目所在野馬土手	1.2 ～ 1.4	6	1	無	一重土手	鎌ケ谷市教育委員会　1989　『昭和63年度鎌ケ谷市内遺跡群発掘調査概報』鎌ケ谷市
中沢1484番地所在野馬土手	土手A 1.8 土手B 0.8 ～1	不明 2	不明 －	有（２条） 堀A'－ゆるやかな箱形。 上部幅2.3～2.5m、 底部幅１m前後、深さ１m、 堀底部と土手Bの比高２m。 堀B'－不整形。 上部幅３～４m、底部幅1.6～2.2m、深さ0.8～1.2m。	二重土手。 土手Aと土手Bは平行。	鎌ケ谷市教育委員会　1990　『平成元年度鎌ケ谷市内遺跡群発掘調査概報』鎌ケ谷市
鎌ケ谷５丁目所在野馬土手	1～ 1.2	3～4	0.2 ～ 0.3	有（１条） 箱薬研形（下野牧の外側に堀）	一重土手	鎌ケ谷村と下野牧との境に所在。 鎌ケ谷市教育委員会　1991　『平成２年度鎌ケ谷市内遺跡群発掘調査概報』鎌ケ谷市
富岡２丁目所在野馬土手	2	7	1～ 1.5	無	一重土手	砂質の暗褐色土の盛土。 鎌ケ谷市教育委員会　1992　『平成３年度鎌ケ谷市内遺跡群発掘調査概報』鎌ケ谷市
鎌ケ谷１丁目所在野馬土手	1.4	0.5	4～ 1.5	有（１条）。土手の西側に所在。箱薬研形で、底面平坦。上部幅3.8m、底部幅0.5m、深さ1.8m。堀底部と土手頂上部との比高差2.75m。	二重土手か（中野牧の込跡につながる野馬土手が二重のため）。	鎌ケ谷市教育委員会　1992　『平成３年度鎌ケ谷市内遺跡群発掘調査概報』鎌ケ谷市
木戸脇貝塚（北中沢２丁目所在）	－	－	－	溝１条。幅1.1m、深さ0.3mと幅1.7m、深さ0.7mの箱薬研形。	不明であるが、存在していた可能性あり。	鎌ケ谷市教育委員会　1993　『平成４年度鎌ケ谷市内遺跡群発掘調査概報』鎌ケ谷市
小金中野牧の込跡	3～5	6～9	1.5 ～2	「込」の土手の南側の外には無。	込跡。「込」の内側を掘り寝め、その排土を利用して土手を構築。	昭和49年県指定史跡。同年、市史編さん事業の一環として測量調査実施。 鎌ケ谷市教育委員会　1994　『平成５年度鎌ケ谷市内遺跡群発掘調査概報』鎌ケ谷市
鎌ケ谷１丁目所在野馬土手	2.1	3.8	0.7	有（１条）。土手の西側。箱薬研形、底部平坦。 上部幅2.8m、底部幅0.6m、深さ１m。 堀の東側に幅0.4～0.5m、深さ0.4mの溝。二重の堀か不明。	不明	鎌ケ谷市教育委員会　1995　『平成６年度鎌ケ谷市内遺跡群発掘調査概報』鎌ケ谷市
木戸脇貝塚（北中沢２丁目所在）	－	－	－	溝２条。幅2.5m、深さ0.7mの浅鉢状。幅2.5m、深さ1.6mの箱薬研形。溝と溝の間に径0.8m、深さ0.27mのピット。	－	鎌ケ谷市教育委員会　1997　『平成７・８年度　鎌ケ谷市内遺跡群発掘調査概報』鎌ケ谷市
南初富３丁目所在馬土手	2.8	6	1.4	撹乱のため不明であるが、存在していた可能性が大きい。	一重土手	本報告書

困難を理由に早くも解散してしまった。前述したように、鎌ケ谷市は、戦後、野菜と梨の生産と共に発展してきた。また、近年の交通網の充実より、さらなる発展が期待されている。

今から約200年ほど前、俳人・小林一茶が、小金原（鎌ケ谷）に足をのばし、

「しぐるるや　煙草法度の　小金原」「母親が　番してのます　清水かな」

などの名句を残している。今回調査した馬土手は、一茶が見た当時の景観の一部を想起させるものであり、貴重な資料を提供したと言える。

注１　馬土手と作場道や往環と交差するところに作られ、「突棚（くぐりまち）」とも言う。野馬の逃亡防止、通行人の人別改めを行った。「五助木戸」のように木戸番がいた所もあった（松下・1982）。

２　東葛飾地方教育研究所　1972　『東葛いまとむかし』　財団法人東葛教育会館

３・５　松戸市編さん委員会　1977　『松戸市史』中巻　近世編　松戸市
　　松下邦夫　1982　『改訂新版　松戸の歴史案内』　郷土史出版

４　「御放馬囲い」とも言い、優秀な野馬の増殖牧場のことである。

遺跡周辺空中写真(撮影：昭和45年、S=1：13,000)

図版2

1.調査前近景(南西から)

2.調査前近景(北東から)

3.第1トレンチ全景
(南西から)

1.第2トレンチ全景
(南西から)

2.第2トレンチ全景(北東から)

3.第2トレンチ土層断面(南西から)

4.第1トレンチP1・2(南東から)

5.第2トレンチP3(南東から)

6.県指定史跡小金中野牧の迄跡

7.調査区隣接の馬頭観世音等合祀場所

報告書抄録

ふ り が な	かまがやしみなみはつとみさんちょうめしょざいうまどて
書　　名	鎌ケ谷市南初富３丁目所在馬土手
副 書 名	船橋・我孫子バイパス線建設埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第３４１集
編 著 者	白鳥　章
編 集 機 関	財団法人　千葉県文化財センター
所　在　地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡８０９－２　Tel 043－422－8811
発行年月日	西暦１９９８年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
南初富３丁目 所在馬土手	千葉県鎌ケ谷市 南初富３丁目 648－1,327ほか	２２４	００９	35度 45分 53秒	140度 0分 45秒	19970611～ 19970623	250	船橋・我孫子バイパス線建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主　な　遺　構	主　な　遺　物	特　記　事　項
南初富３丁目 所在馬土手	馬土手	近世	馬土手　１条 ピット　３基	銭貨（寛永通宝）	小金中野牧の馬土手の一部である。馬土手の構造は、一重土手で、両側に堀（溝）が付帯していた可能性が大きい。

千葉県文化財センター調査報告第341集

鎌ケ谷市南初富３丁目所在馬土手

船橋・我孫子バイパス線建設埋蔵文化財調査報告書

平成10年３月31日発行

編　　集　　財団法人 千葉県文化財センター

発　　行　　千　葉　県　都　市　部

千葉市中央区市場町1-1

財団法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809-2

印　　刷　　株式会社　エリート印刷

千葉市中央区市場町6-8